

埼玉県スポーツ推進審議会委員による意見交換会【議事録】

日時：平成26年3月20日（木）午後2：00～4：00

場所：埼玉県県民健康センター 大会議室C

埼玉県スポーツ推進審議会を招集したところ、委員の出席者が会議開催の定足数を満たさなかったため、出席した委員による意見交換会を開催した。

【議 事】

(1) 報告事項

ア 本県児童生徒の体力について

イ 本県の競技力について

(ア) 第69回国民体育大会冬季大会の結果について

(イ) ソチオリンピック・パラリンピック本県関係選手の結果について

(ウ) 平成25年度埼玉県体育賞について

ウ 平成26年度体育・スポーツ関係事業について

(2) 協議事項

ア 埼玉県スポーツ推進計画の進捗状況について

イ 日本スポーツマスターズ2014埼玉大会の開催に向けた準備状況について

【出・欠席委員】

(1) 出席委員（10名）

小澤治夫委員（会長）、伊倉晶子委員、石原美弥委員、

重田博委員、須賀敬史委員、富松理恵子委員、友清創委員、

樋口竜也委員、兵藤明子委員、丸山正董委員

(2) 欠席委員（10名）

三戸一嘉委員（副会長）、河本弘委員、清雲栄純委員、

竹内晃治委員、深谷隆委員、藤倉二三男委員、星野明弘委員、

和田洋子委員、島村穰委員、福島弘文委員

- 1 開会 司会 市町村支援部スポーツ振興課副課長 大沢正雄
- 2 挨拶 市町村支援部副部長 新井彰
- 3 議事

(1) 報告事項

アについて、事務局から資料1をもとに説明した。

○ 伊倉委員

1日の睡眠時間について、小学校5年生は埼玉県が全国1位ですが、中学校2年生になると、男子は25位に下がってしまっていますが、理由について教えてください。

○ 事務局（保健体育課）

様々な理由が考えられますが、例えば、塾へ行くために帰宅時間が遅くなる子が全国平均より多いのではないかと想定しています。また、ゲームなどを行っている子も多いのではないかと想定しています。ただ、明確な理由は把握していません。

○ 重田委員

私は特別支援学校に勤務しています。新体力テストは6歳から65歳まで幅広く行われています。特別支援学校、特に知的障害の生徒については、新体力テストを実施し、データを取っている学校もたくさんあります。インクルーシブ教育の推進の意味でも、特別支援学校の生徒のデータも資料に載せてほしいと思っております。以前、なわとびの関係で、体育必携に載せていただいたこともあります。特別支援学校にも、高い水準の記録を出すお子さんもいますので、ゆくゆくは資料に掲載していただくとありがたいです。

特別支援学校には、体育専門の教員が3割近くを占める学校もあります。そういった教員が体育の研修会に出席しても、資料に特別支援学校のことを掲載されていないので、研修会への参加意欲が低下してしまう部分もあります。こういった資料に掲載されれば、他の学校の先生にも特別支援学校の取組を知ってもらい、データとして残すことができると思いますので、よろしく願いいたします。

○ 事務局（保健体育課）

特別支援学校では、お子さんによって、できる種目とできない種目があると思います。よく検討しながら進めさせていただければと思っております。

○ 小澤議長

文部科学省の報告書にも特別支援学校の生徒のデータは出てきません。埼玉県为学校体育必携は、全国に先駆けた素晴らしいものだと思っておりますので、今の重田委員の御要望についても、全国に先駆けてできるのであれば、非常に良いのではないかと思います。

この調査は、全数調査でしょうか、抽出調査でしょうか。

○ 事務局（保健体育課）

今回は全数調査でございます。

○ 小澤議長

では、調査地域によって、結果に差が出ているわけではないのですね。

○ 丸山委員

この調査項目は何項目ぐらいあるのですか。もう少し細かい質問事項にさせていただけると、重田委員がおっしゃったこともフォローできるのかと思います。学校教育では、点数が良いことのみを目標として、個々の運動能力や美術の才能といったものがこういう統計では出てこないですよ。運動と学力の関係も見ていくべきです。運動能力も学力も高い人もたくさんいて、医者でも、オリンピックに出ている人もいます。学力だけではないものを見つけてあげて、教育委員会でやらないと、統計に表れないのではないかと思います。推測だけで進めていくと、違っていってしまうのではないかと思います。

○ 事務局（保健体育課）

運動能力・運動習慣等調査というものは、小学校5年生と中学校2年生だけに行われている調査でございます。調査の内容については、非常に細かい調査でございます。本県では、体力向上のために生活習慣を大事にしよう、生活習慣をきちんとすれば体力が伸びるだろうという目標がございましたので、この資料にはその抜粋として、「朝食を食べ

る」、「睡眠時間」といった、生活習慣の中心になる部分について載せさせていただいたものでございます。

体力と生活習慣の関係、体力と学力の関係の関連性といったことも言われておりますので、そういった点も含めまして掲載については検討させていただきたいと考えております。

○ 伊倉委員

事業の指定校には、予算は付くのでしょうか。

○ 事務局（保健体育課）

朝から一日もりもりわくわく推進事業には、予算が付いております。朝遊びをするときに、地域の方や大学生と一緒に遊んでいただいております。そういう方の保険や交通費を含んだ報償費について支出しております。

○ 伊倉委員

1校あたりの金額はいくらぐらいなのでしょう。

○ 事務局（保健体育課）

今年度の事業予算額は758万円となっております。小学校を各地区に2校ずつ、8校ほど指定してございます。各校で、地域の方をお願いをしている人数が異なりますが、概ね、1校あたり30万円ほどです。

○ 小澤議長

この報告書を見ると、埼玉県はA～Cランクの合計が埼玉県は非常に多く、順位だけ見ると上位です。このスポーツ推進審議会でも議論になっていましたが、全国順位は問題ではない、子どもたちの体力が健康的でいい生活ができるかどうかの問題なんだということ考えると、Cランク以上をとってれば、Aランクではなくても、生活関連体力、健康関連体力といい、世界的には、health related fitnessと言うんですが、これが子供時代に担保されていれば、生涯にわたって豊かな人生を歩んでいけると言われています。そういう意味では、Cランク以上が8割に到達できているというのは、ある水準をクリアできているのではないかと思います。

イについて、事務局から資料2～4をもとに説明した。

○ 重田委員

障害者スポーツについて、今年度から体育賞の対象としていただき、本当にありがとうございます。5・6名の選手・監督が、体育賞を受賞させていただきました。特に、会長特別賞の金子遼選手は、チェコ2013INAS陸上世界選手権で優勝しました。INASとは、知的障害者の世界大会でございます。高桑早生選手のIPCとは身体障害者の世界大会です。また、門脇翠選手は、デフリンピックとって、聾啞者の大会で入賞し、表彰していただきました。

○ 樋口委員

活躍した選手だけではなく、指導者も体育賞の対象となるのでしょうか。

○ 事務局（スポーツ振興課）

指導者については、功労賞として、各競技団体に指導に貢献された方を表彰しています。また、優秀選手賞では、団体に受賞されているところもあり、その監督について、優秀選手賞の中で選手と同様に表彰しております。

○ 樋口委員

スポーツの科学分析や科学チームも、今後、オリンピックに向けて必要ではないかと思えます。科学者や大学の先生方も表彰の対象としてはどうでしょうか。

○ 事務局（スポーツ振興課）

貴重な御提言として承りたいと思います。体育賞は、埼玉県と埼玉県体育協会で行っているものでございますので、スポーツ推進審議会委員から御意見をいただいたということで、今後の検討の材料にしていきたいと思えます。

○ 小澤議長

国際大会3位入賞者として、優秀選手賞を受賞している平沢奈古選手は、以前、このスポーツ推進審議会の委員であった方ですね。この委員からも、活躍されている方がいら

っしやるので、ぜひ皆様もスポーツをやっていたらと思いました。

ウについて事務局より資料5を基に説明した。

埼玉県スポーツ推進計画の進捗状況について事務局より資料6を基に説明した。

○ 伊倉委員

私は、埼玉県体育協会に籍をおきまして、総合型地域スポーツクラブのクラブアドバイザーをしており、88クラブのサポートをしております。また、プライベートでも、志木市でクラブを立ち上げ、志木市から放課後子供教室事業を受託して運営をしているところです。そういった立場で、現場代表として発言をさせていただきたいと思います。

スポーツ活動を生涯にわたって行う時には、地域＝学校との関連性は切っても切れないと考えております。ただ、学校の先生方との意識の差を非常に感じております。実際、昨日の夜、ある小学校の教頭先生から「体育館が傷むかもしれないから、使用しないでほしい」という要望をいただきました。市からの受託事業で放課後子供教室事業を行っているのですが、その事業でさえも教頭先生がそのようにおっしゃいます。こういったことは、他のクラブの現場でも非常に多いです。

志木市の規則を調べると、施設責任者は教育長であると書いてあります。教育長の指示のもと、管理者として教頭先生がそのような意見をおっしゃったのかと思ったのですが、教育長はそのような指示はしていないとのことでした。そうすると、教頭先生の個人的な御発言なのかとも思いました。

そのあたりで、管理職になる際や教職課程の中で、地域と学校とのつながりや地域へのスポーツの影響力を教育するようなカリキュラムを組んでいただけないものかと考えております。そういったカリキュラムや機会はあるのでしょうか。あるのであれば、ぜひ学校セクションと連携をしていただきたいと思います。

○ 事務局（スポーツ振興課）

教員の年次研修の中では、生涯スポーツと学校教育の関わりについて、地域と学校とのつながりが非常に重要であるということをお話をさせていただいております。参加した先生方からは、「今後は地域とのつながりを大事にしていきたい」という感想をいただいております。こういったことが、地域スポーツと学校とのつながりに広がっていけばいいの

ではないかと考えております。

○ 伊倉委員

ジュニアアスリート発掘育成事業ですが、私は、一時期、文部科学省に勤務しております。同様の事業を国でも行っております。国の担当者から聞いた話だと、選ばれた子は、運動はできるけれども、学校の成績はよくない子が多いと申しておりました。また、運動能力が高くて、ちやほやされてきているので、他の子とコミュニケーションが取れないんだと聞いたことがあります。

埼玉からいずれオリンピック選手になる可能性のある子たちには、体力向上や技術だけでなく、成長過程にあった、人間としての基本的なものを教えていくようなカリキュラムを検討いただけるといいのではないかと思います。5年生、6年生になると、自分たちで目標設定をできるようになってまいりますので、単純に種目を体験するとかいうこと以上に、埼玉ならではのプラチナキッズ構想を追加していただけるといいのかなと考えます。

○ 事務局（スポーツ振興課）

ジュニアアスリート発掘育成事業の育成プログラム作成委員会の中でも、コミュニケーション能力や知的能力の開発が大切だと位置付けております。特に、夏休み中の宿泊研修では、コミュニケーションを図る機会を作っておりますし、講師の先生やトップアスリートの講演でも、コミュニケーションや人間関係づくりの大切さについてお話しいただいております。県体育協会と連携を取りながら、これをさらに充実させていきたいと考えております。

○ 小澤議長

ソチオリンピックもそうですが、日本では伝統的に、超早期から技術力を高めることが行われています。ところが、北欧諸国では、いろいろな種目をやっているアスリートがオリンピックに出ています。

デンマークでは、アンケート調査で、子供たちに「練習や試合に満足していますか」と聞くと、98%が「満足している」と答えています。日本の子供たちは6%です。その数値を鵜呑みにしていいのかというと、これまでのスポーツ環境やスポーツ推進のあり方の歴史が違うのですから、単純にいい、悪いとは言えないと思いますが、このあたりは、今後

の課題としていただきたいなと思います。

○ 伊倉委員

県立学校の体育施設開放についてですが、志木高校ではテニスコートが朝の6時から8時の間だけ使えるということでした。近所なのでよく通るのですが、大きなグラウンドも、土日、空いているように見えます。もちろん、部活動がある時は難しいと思うのですが、もっと活用できるようにしていただくことはできないのかと感じました。

○ 事務局（スポーツ振興課）

場所の確保については、多くの方が望んでいる課題だと認識しております。その中で、学校教育に支障のない範囲でということ、各学校に開放をお願いしております。地域スポーツの指導者の方には御満足いただけないことは承知しておりますが、なんとか一生懸命、学校開放に努めているところでございます。今後も引き続き、開放時間、開放施設を少しでも増やしていただけるように、各学校をお願いを続けてまいります。

○ 須賀委員

全体目標について、スポーツ施策に対する県民満足度を75%以上に持っていくというのは、かなり大変なことだと思います。裏を返せば、不満に思っているところを取り除いていけば、満足度はおのずと上がっていくと思います。

不満の内容には、スポーツをする環境の整備が遅れているというようなこともあるのではないかと思います。アンケートの中で、不満に思っていることの内容を尋ねたデータがあればお示しいただきたいと思います。

○ 事務局（スポーツ振興課）

75%という目標を掲げている以上は、満足していない4割の部分をどう変えていくかということが課題だと思います。実際のアンケートでは満足しているか、満足していないかの問いかけだけではなく、スポーツをやっているかどうか、観戦しているかなども、併せてお尋ねしています。来年度以降、不満足に思っている4割の方に目を向けるような設問を検討したいと思います。

○ 丸山委員

日本人の心のあり方は、武士道のように、自分を高めるために厳しくやっていくというところにあるのではないかと思います。ところが、外国の指導者は、生徒を褒めて伸ばしていきます。その違いが日本のスポーツに出てきていると思います。

障害者スポーツなどを見ていると、できない人ができるようになってみんなが喜ぶことで、オリンピックでもいい成績を取っています。車いすスキーなどでの道具の開発なども非常にうまくいっています。指導者の心の持ち方で、もう少し褒めてやっていけば、楽しくなるのではないかと思います。

私も、講演会では、褒めてあげたほうがいいと言っているけど、自分が社員教育をする時は、隣にいる人にはどうしても厳しくなって、褒めてあげることがなかなかできません。例えば、糖尿病でも、インシュリンをきなさいと言うと面倒だと感じるけれども、食事したら薬を飲みなさいと言えば、食事を面倒を感じる人はいないわけです。「食事した」と言われたら、「ああそうか、じゃあ、お薬飲もう」と言ってもいいんです。そういう、状況を見ながら教えていくスキルを皆が持たないといけないのかなと思います。

糖尿病でも、この3年ぐらいでいろいろなことが起こってきたが、肌で感じるのは、昔から糖尿病を患っている人たちの考えが変わらないということです。世の中が変わってきているのに、変わらない。スポーツ指導者も世の中に追い付いていけないところに問題があると思います。報道でも、褒めて運動能力を伸ばすキャンペーンなどをしていただくと、日本人の指導者の心が和らぐのではないかと思います。

○ 石原委員

週に1回以上スポーツをする20歳以上の県民の割合について、数値目標達成が本意ではないとは思いますが、目標をどこまで達成できるかと考えた時に、このアンケートについて、地域分布や、男女、年代によって分析すると、観察できることが増えるのではないかと思います。また、日本人の国民性は控え目ですので、スポーツの定義を大上段に構えていて、数値が少なめに出ている可能性もあると思いますので、そういった見直しもできたらいいのではと思います。

○ 事務局（スポーツ振興課）

スポーツ実施率のアンケートについては、「軽いウォーキングを含みます。」というよ

うな注釈を付けて行っております。その上で、スポーツをやらない理由として挙げられているのは、「忙しい」ということです。世代分布をみると、50代60代と年代が上がるに従って実施率が上がっていくという構図です。30代の実施率が低く、子育てで忙しい、仕事で忙しいという結果がありますので、何かをスポーツに変えることが必要だと思っております。忙しくてスポーツに新たに時間は割けないけれどもという方に、何かをスポーツに変えるような発想で例えば、「スポーツ通勤」だとか、お子様との遊びの時間をスポーツのほうにシフトする「親子スポーツ」などに力を入れているところでございます。

○ 友清委員

スポーツ推進計画のなかで、総合型地域スポーツクラブと学校施設とは絶対切り離せないものだと思います。ここが上手く連携できるかできないかで、成功するかしないかが決まってくるのかなと思います。

施設管理者や学校の校長先生、教頭先生が、なにかあったら責任を取らなければいけないからリスクを回避しようと考えたら、先ほど伊倉委員の事例のようなことがあるのだと思います。もっと意識を改革する研修をしてほしい、もっと学校管理者の方にスポーツとの連携をやっていくしかないんだと思ってほしいと思います。

私の家の近くの学校も、私が小さい頃はグラウンドにサッカーゴールがあったものが、何かあったら危ないという理由だけで、今はありません。そうなってくると、自分たちでスポーツクラブに入らない人以外は、学校の授業以外では、なかなかスポーツをする機会がなくなってしまいます。そうすると、やっている人とやってない人の差がどんどん開いていってしまいます。そうではなくて、学校として、地域として、スポーツの底辺を広げていくのがスポーツ推進計画の大事な核だと思いますので、学校管理者の意識に対する研修は大切だと思いました。

また、sportsとgamesとがあって、sportsとは楽しむもの、gamesとは勝負するもので、オリンピックはgamesです。とにかく、小学校の時から大会がたくさんあって、現場の指導者は、とにかく勝負にこだわるんです。でも、もっとグローバルに考えると、小学生やジュニアの時代は、まずsportsとして楽しんで、そこから才能のある人がエリート教育を受けて、勝負の世界に入っていくというのが、サッカーの世界や欧米の考え方です。日本では、指導者が試合中に小さな選手を起立させて叱咤している、やっつけて楽しいのかなと思うこともあります。私も報道しながら矛盾を感じることもあります。スポーツを一生

かけて楽しむことが長生きの秘訣で、医療費削減にもつながりますので、それを伝えることが社会全体で取り組んでいかなければならないと感じています。

○ 小澤議長

デンマークなどの北欧諸国では、中学校以下の全国大会自体がないんです。地域大会だけなんです。国民も国の歴史も違いますから、簡単には比較できませんが。

全国的な問題を言っても仕方がありませんので、埼玉県は、良いプランを立てて、全国に先駆けて、良いスポーツ振興をしていくことが大切だと思います。

○ 重田委員

学校開放は、非常に重要だと思うのですが、AEDが置いていない状態です。危険性を考えると、体育館にはAEDを置く必要があります。置いてある学校もありますが、AEDが使えない状況でも学校開放をしています。そこは、安全性等も考えながらやっていく必要があると思います。

また、バリアフリーの視点を持った施設開放をお願いしたいと思います。車いすバスケットなど、体育館が傷つくからという理由で断られてしまいます。障害者も、どこの施設も使えるようにしていただければと思います。スロープを付けたりということも考えていただければと思います。

○ 丸山委員

AEDについては、スポーツ医会で県に要望して、全ての公立学校に1台ずつ設置してあると思います。障害者スポーツで利用する施設にも、設置したほうがよいと思いますが、どうなっているのでしょうか。AEDがあつて助かった人は大勢いますので、ぜひ障害者スポーツ施設にも設置を推進していただきたいです。

○ 事務局（保健体育課）

AEDの設置につきましては、小中学校も含め、全ての公立学校に設置がされております。教職員にも、AEDの活用方法について、毎年講習会を実施するように指示をしております。小中学校では98%、県立学校でも95%の学校で講習会を実施しています。100%の実施に向けて指示をしているところでございます。

○ 丸山委員

さいたま市の中で、子供を亡くしたお母さんが、二度と同じことが起こらないようにキャンペーンを始めて、小児科の医師と救命救急運動をしております。心臓マッサージの方法を伝えています。押したら音が鳴る小さな機械を皆で120回ぐらい一斉に押して、心臓マッサージのリズムを覚えさせるというキャンペーンをしています。ただ、日本人は奥ゆかしいので、心臓マッサージの方法を習っても、いざとなると「今やっていいのか」と逡巡してしまう、「今やっても助からなかったらどうしよう」ということばかり考えて、「やらないと助からない」という精神力が足りないのではないかと思います。やってみせなきゃいけないので、失敗を恐れなくてやることを教えなければならないと思います。失敗を受け入れる社会を作っていかなければならないと思います。

○ 重田委員

AEDは学校の中にはあるが、学校開放の際に手の届く場所にはないわけです。手の届く場所に設置している学校もあるのですが、手の届く場所に設置されていない学校もあります。

○ 丸山委員

鍵がかかっていて、取り出して使えなければ意味がありませんので、学校開放でも使えるようにしていただきたいと思います。

○ 小澤議長

学校開放ひとつとっても、さまざまな議論が出てきます。中央教育審議会でも、国の統計では、ほぼ100%の学校で学校開放が実施できていることになっています。その数字だけ見ると、学校開放が進んでいるように見えますが、現場ではさまざまな問題があります。これも、今後の検討課題として考えていただければと思います。

○ 富松委員

埼玉県内の大学で働いていても、スポーツ推進計画について、教員は知っていますが、学生は知りません。授業の中で伝えていったり、私自身も活用していきたいと思いました。

学校教育の充実の中で、さまざまな研究会が行われていますが、将来的には、それを受講した先生方がその後どうなったか、それを受けた子供たちがどう感じているのかを評価していくと、研修会の意味も増してくるのではないかと思います。

○ 兵藤委員

AEDに関して、さいたま市でも、学校にはあるが、体育館や運動場を使っている人が使えない場所に設置してあることがあります。私の利用する学校の方は、「ガラスを破って校舎に入って使ってください」とおっしゃっていましたが、現実的ではありませんでした。施設開放委員会で、青少年育成会などに資金を出していただいて、体育館の中で、窓を割れば運動場を利用している人も使える場所にAEDを設置しました。現場のスポーツ指導者としては、本当に必要性を感じているので、その必要性をもっとアピールしていかなくてはならないと感じています。施設のどこかにあればいいという感覚ではいけないことです。公共体育館にも全て設置がされていますが、実際に使って命が助けられるんだということを皆が感じないといけないのではないかと思います。

埼玉県は、ずいぶんいろいろな取り組みをしているのだということが分かりました。指標の数値も向上していて、頼もしいなと感じました。私は、バスケットを専門で教えているのですが、ドイツのコーチに話を聞くと、楽しくやっていって、将来は素晴らしいアスリートを育てていくそうです。日本の場合、バスケットでは、高校までは世界に通用する選手がたくさんいるのですが、大人になって、オリンピックに出場する年齢になると、世界に通用しない選手が増えてしまいます。成績が伸びていかないということを知りました。ジュニアアスリートを育てるのもいいが、世界に出ていくために、ジュニアの後どうしたらいいかを考えて取り組まなければならないと思います。

日本スポーツマスターズ2014埼玉大会の開催に向けた準備状況について事務局より資料6を基に説明した。

5 閉会 司会 市町村支援部スポーツ振興課副課長 大沢正雄